式子内親王試論

二十九回生　松永弥生

目次

序
本論
第一章　心情語
第一節　式子内親王の心情語
第二節　同時代女流歌人との比較
第三節　前時代女流歌人との比較
第四節　『新古今和歌集』との比較
第二章　歌語
第一節　式子内親王の歌語
第二節　式子内親王の措辞
第三節　二つの禁制詞
第三章　式子内親王の世界
結び

序

これまで、式子内親王については様々な研究・論述がなされてきたが、本論では「心情語」と「歌語」という角度から内親王の和歌をながめ、その美的世界を探っていきたいと思う。具体的には、第一章では従来言われている「ながめの歌人」「しのぶる恋の歌人」としての式子像について、心情語の用い方やその特色などから検討を加えてみる。第二、三章では、内親王の新造語ではないかと考えられる歌語や詞の措辞を基にして、その歌語の持つ特質と内親王の和歌の歴史的位置を考察するとともに、歌風から式子内親王の世界を明らかにしていきたい。

底本として、岩波古典文学大系『平安鎌倉私家集』所収の『式子内親王集』を用いた。

第一章　心情語

第一節　式子内親王の心情語

式子内親王が自らの心を吐露した和歌の中に詠まれている心情語―心の中の思いを直接表現していると思われる語―の数を調べたものが次の表である。

計	あさまし	ゆかし	うらめづらし	うれし	こひし	うとし	こころぼそし	つれなし	むなし	つらし	はかなし	かなし	さびし	うし	しのぶ	あはれ	ながめ	計
22		1	1		1		1	2	2	1	1		1	2		1	8	春
15						1							1	1	3	4	5	夏
24						1					1	2				5	15	秋
8					1		1		1	3			4			1	1	冬
17	1							1	1		2				2	4	2	戀
11												2		3	1	3	2	雑
1											1							鳥
1															1			山家
3				1								1			1			釈教
102	1	1	1	1	2	2	2	3	4	4	5	5	6	6	8	18	33	計

式子内親王の心情語を品詞別に見ると、形容詞一四語、動詞二語、感動詞一語であり、性格から見れば『陰性』、つまり「うし」「さびし」などの悲しみ、苦しみ、不安定な状態を示す形容詞の例が多く見られるのに対して、「うれし」「こひし」「ゆかし」などの『陽性』の語は極めて少ない。

心情語の例が多いものを見ると、第一位は「ながめ」の三三例で全体の32.4%を占め、内親王が「ながめの歌人」と呼ばれる一つの根拠をなすと考えられる。

第二節　同時代女流歌人との比較

内親王の心情語の上位五語を、ほぼ同時代を生きた建礼門院右京大夫、彼女より一世代後に活躍した俊成卿女及び宮内卿と使用数・使用率等を比較したものが次の表である。

	ながめ	あはれ	しのぶ	うし	さびし	心情語数	調査歌数
式子内親王	33 (8.4) ①	18 (4.6) ②	8 (2.0) ③	6 (1.5) ④	6 (1.5) ④	102 (26.0)	393
右京大夫	21 (6.7) ①	17 (5.4) ④	7 (2.2) ⑤	21 (6.7) ①	1 (0.3) ⑯	125 (40.1)	312
俊成卿女	3 (1.2) ⑦	6 (2.4) ③	10 (4.0) ①	5 (2.0) ④	3 (1.2) ⑦	49 (19.1)	247
宮内卿	6 (4.4) ①	3 (2.2) ②	3 (2.2) ②			16 (11.8)	136

( )の中は調査歌数に対する百分率、○印でかこんだ数字はその歌人の心情語順位を示す。

＜ながめ＞

「ながめ」が明瞭に現われるのは、在原業平・和泉式部・式子内親王の如く情熱的な歌人においてである。右京大夫もまた、

ながむれば心もつきて星あひの空にみちぬ我おもひかな

などの恋人を思う数々の絶唱があり、悲哀と感傷の中にも情熱を秘めた人といってよいと思われるので、内親王と同じく「ながめ」の使用数の多さにも頷けるのである。

＜うし＞＜さびし＞

「ながめ」においては類似を示す内親王と右京大夫ではあるが、「うし」と「さびし」については差異が見られる。

表からわかるように、内親王は「うし」と「さびし」を1.5%と同率用いているが、右京大夫は「うし」を二一例と一番多く用い、「さびし」は

ふくる夜の寝覚さびしき袖のうへにおとにもぬらす春の雨かな

に一例見えるだけである。

このことから考えると、内親王が生きてゆく中で弧独の憂愁と寂寥を感じているのとは異なって、右京大夫は「さびし」さよりも相手の（多く恋愛の）態度のつれなさを恨むことが多かったのではないだろうか。これはやはり、多くの恋歌を詠みながらも生涯恋の生活を持たなかったと思われる内親王と、資盛・隆信らと現実の恋を経験した右京大夫との差ではないかと思われるのである。

全体として見るならば、内親王の心情語の用い方はその上位五語が他の三人と大差が見られないことに依り、その時代の女流歌人と同じ範疇に入っていると考えることができるだろう。

第三節　前時代女流歌人との比較

本節では、内親王の心情語を王朝女流歌人の中でも、内親王と同じく「夢」「うたたね」を多く詠んだ小野小町と和泉式部のそれと比べる。前節と同じように次に表を掲げる。

	ながめ	あはれ	しのぶ	うし	さびし	心情語数	調査歌数
式子内親王	33 (8.4) ①	18 (4.6) ②	8 (2.0) ③	6 (1.5) ④	6 (1.5) ④	102 (26.0)	393
和泉式部	14 (5.3) ②	11 (4.1) ④	7 (2.4) ⑤	19 (7.2) ①		85 (32.4)	263
小野小町	3 (2.6) ⑦	7 (6.1) ②	2 (1.7) ⑧	14 (12.2) ①		56 (48.7)	115

＜ながめ＞

「ながめ」は女流歌人の基本的姿勢を示す語であり、内親王と和泉式部は使用率の近似を見せ、小野小町の代表歌、

花のいろはうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

と内親王の和歌、

219　花は散りてその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる

の間には悲哀感や孤独感に相通うものが感じられるが、やはり微妙な差が認められる。

その差異を、阿部武彦氏は「和泉式部が、現実充足において『ながめ』の状態が断ち切られるのに対して、式子内

親王の場合は、永遠に『ながめ』続ける他に道はなかった。」とされている。つまり、内親王の「ながめ」の和歌には、和泉式部らのように恋愛の情調は流れておらず、

301 ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮の空

といった人生の暗鬱な愁いが感じられる。

内親王の心情語は、外見においては王朝女流歌人の系譜に連なっているが、内面的には、平安朝という安泰な時間を過した歌人と、動乱の中世を生きた歌人の和歌を詠む姿勢の違いが認められるのである。

第四節　『新古今和歌集』との比較

	ながめ	あはれ	しのぶ	うし	さびし	心情語数	調査歌数
式子内親王	33 (8.4) ①	18 (4.6) ②	8 (2.0) ③	6 (1.5) ④	6 (1.5) ④	102 (26.0)	393
新古今和歌集	64 (3.2) ①	55 (2.7) ②	54 (2.7) ③	52 (2.6) ④	12 (0.6) ⑫	441 (30.0)	2005

内親王の心情語を『新古今和歌集』のそれと比べてみた。この表で見るかぎり、前二節で比較した歌人たちよりも近似を示す。これは内親王の和歌が心情語の面においても新古今的特質を備えており、かつ内親王が新古今歌壇に属していることを示す要因となっているように思われる。

内親王が多く用いた心情語は、伝統的に和歌に詠まれているし、各人の用い方にも大差はないのであるが、「ながめ」は他に類が見られない程の高い使用率を示し、「ながめの歌人」にふさわしい特色が見られる。

だが、「しのぶる恋の歌人」と言われる特色は認められない。このことが喧伝されているのは、やはり、

318 玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

という和歌のイメージからであろう。そして、『百人一首』『百人秀歌』『定家十体』等での定家の評価に依り、後世内親王の代表歌が「玉の緒よ」の歌とされ、「しのぶる恋の歌人」という呼称が与えられたのだと考えられるのである。

「ながめ」という語は、式子内親王にとって特別な詠歌姿勢を表わす語であると見做すことができるが、それは単に物思いに耽るものではなく、内親王が存在した歴史の背景と境遇を考慮すると、實方清氏の言われた、「『ながめ』

は激しい情熱の結果ではあるが、それが内攻しているために外見は甚だ穏やかな様相を示すのである。まさしく禁欲抑情の結果の状態ではあろう。」という「ながめ」の状態がふさわしく、人生の憂苦を詠嘆する一つの姿勢として現われると思われるのである。

第二章　歌語

和歌一首は詠者の心と、五音七音の詞（以下歌語と称す）と、姿とから構築される。とすれば、和歌の生命が第一心―資質―にあることは言うまでもないが、同時に詞の選択と詞の措辞もまた必要欠くべからざる条件である。この点から、内親王の歌語が伝統的なものであるか（先行歌に詠まれているか）、それとも内親王独自新造語であるのか、措辞については内親王独自の歌語は第何句目に集中しているのかを見てゆく。

第一節　式子内親王の歌語

内親王の先行歌を、『万葉集』と『古今集』以下『詞花集』まで、私家集は内親王より没年が早い人のものとした。しかし例外として、藤原俊成は内親王の和歌の師とされるなどの深い関係から先行歌人とした。物語歌・日記歌については、『堤中納言物語』までを先行歌として扱った。

『国歌大観正続各句索引』で検出可能な範囲において、先行歌の見られない歌語を調査すると、次のような結果が得られた。

初句	二句	三句	四句	五句	計
105	283	130	292	257	1,067

内親王歌の歌語は一九六三語であり、重出語を除くと一七六九語となるが、そのうち一〇六七語が内親王の新造語ではないかと考えられることは、伝統的な歌語を詠むことばかりに満足せず、新しい表現を追求し洗練してゆく内親王の詠歌姿勢の現われであろう。

そして、その試みは、

203 山深み春とも知らぬ松の色にだえたえかかる雪の玉水

209 ながめつる今日は昔に成ぬとも軒端の梅よ我を忘るな

（傍点部は先行歌の見られない歌語）などの秀歌に結実しているのである。

第二節　式子内親王の措辞

前記の表でわかるように、内親王の新造語と思われる歌語は第四句目に多く詠まれている。内親王が創造したと考えられる歌語には、その心奥や特質が見られると想像されるので、ここでは第四句目について検討する。

式子内親王の和歌が多量に採らえた『新古今集』の和歌には、「新古今風醸成のための苦心の用意が、特異な技巧的洗練、たとえば三句切・体言止などに結実したことはよ

く知られているが、その結果は、第四句に新古今的表現の極致が集中するようなことになった」という特色が見られる。また、甲本『詠歌一躰』に挙げられている四三の「禁制詞」のうち『新古今集』に原歌が存するものは三二例であるが、実にその四分三、二四例が第四句目である。

以上のことから考えると、第四句目にその歌人独特の表現を詠むことは新古今時代の和歌の一つの特色であり、内親王の和歌も第四句目に新造語とみなされる歌語が多く詠まれていることから、その特性を有していると言えるであろう。

第三節　二つの禁制詞

前節で少し触れた「禁制詞」には、内親王の「露の底なる」「我のみ知りて」の二語が含まれている。「禁制詞」は「名歌の要となっている句で、多くは秀句」であり、「秀歌と見做された作品の中にあって、それを秀歌たらしめている句」で、「禁制詞」が詠まれている内親王の二首の和歌も秀歌であると考えられる。ここで、その二首を鑑賞してみたい。

240　跡もなき庭の淺茅にむすぼほれ露の底なる松蟲の聲

この歌は、『正治二年院御百首歌』に収められ、『新古今和歌集』秋下に入首している。

内親王の和歌には、〈閉づる〉傾向の歌が多いという。たとえば、この句の「露の底なる松蟲の聲」の他に、「月のみ閉づる苔のとぼそに」「おしこめて秋のあはれにしづむかな」などにそれが見られる。閉鎖的・内攻的という点において、「跡もなき」の句は式子内親王的であるといえるのである。

この「松蟲」は、久保田淳氏が述べておられるように詠者自身であろう。訪れる人もない庭の淺茅に結んだ露の奥底のように暗い隅で物思いに沈みこみ、心が閉ざされたまま、やるせなく悲しい姿が浮かんでくる。

内親王が静寂な雰囲気の中に住まっていたらしいことは、『源家長日記』の記事によって窺える。しかし、静かに住み成していても心は平穏ではなかったことが、この和歌によってわかる。内親王という高貴な身分に生まれながらも斎院という特殊な生活を送り、源平の争乱などの不幸な出来事に逢い、世に埋れて生きねばならなかった式子内親王の諦めのため息が、「跡もなき」の句に込められている気がするのである。

もう一つの「禁制詞」「我のみ知りて」が詠まれている一首は、

319　忘れてはうちなげかるゝ夕かなわれのみ知りて過る月日を

である。この歌は「雖レ入二勅撰一不レ見二家集一歌」に含まれ、『新古今集』に入首し、「百首歌の中に忍戀」と詞書がある。また、「定家十体」の「幽玄様」の例歌に挙げられている。

佗しい片恋の歌である。同じく『新古今集』に採られている有名な「忍戀」の歌、

318 玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶことの弱りもぞする

の激情的な絶唱に比べると、これは女の密やかな嘆きが聞えてくるような歌である。自分だけが知っている恋の佗しさに耐えて月日を過してきたが、その歳月のあまりの長さに人知れぬ思いということを忘れ、つい溜息を漏らしてしまう女心の切なさが伝わってくる。

しかし、両歌とも現実には表われず内へ内へと鬱屈し燃え上がる激しい恋情は同じである。この特色が見られるものとして他に、

76 あはれともいはざらめやとおもひつつ我のみしりし世を恋る哉

274 わが恋はしる人もなくせく床の涙もらすなつげのをまくら

などがある。これらの「相手に告げることを拒否する恋歌」は、その思いが心の中に鬱積し閉鎖的である点で、「露の底なる」と同じように〈閉づる〉傾向が見られるように思う。

式子内親王の恋の本領が、恋の相手にも自分の思いを告げることのない相手に忍ぶ恋にあるとするならば、それは「我のみ知りて」という詞に如実に表われていると思われている思われる。自分だけが知っている恋、その内攻して高まる思いを抑えてただ空しく日を送るだけの非行動性は、やはり内親王が生活していた特異な環境に帰結するのではないかと考えられてくるのである。

以上、「露の底なる」「我のみ知りて」の二語が詠まれている和歌を見てみたが、どちらも少なからず式子内親王の憂愁と諦念に満ちた世界を表わしていると思われ、「禁制詞」に定められているのにも肯けるのである。

これらのことから考察すると、式子内親王の第四句目は「露の底なる」「我のみ知りて」が「禁制詞」に定められていることから、内親王独自の世界を物語っているといえるだろう。また、その歌人の個性味のある歌語を第四句目に据えるという新古今時代の和歌の特色を有している点で、『新古今和歌集』の成立を見ずに薨じ、年代的には千載期の歌人といえる内親王の和歌が真に新古今的な歌風を持っているということを指していると見てよいであろう。

第三章　式子内親王の世界

二章までは、心情語・歌語・措辞と、内親王歌を主として形式面から探ってきた。本章では、第二章で見た歌語が内親王と関係の深い藤原俊成とその息子・定家のどちらの影響が強いかということと、内親王の和歌の姿などを手懸かりに内親王の内面的世界について検討してみたい。

式子内親王の歌語一七六九語と、俊成の『長秋詠草』、定家の『拾遺愚草』『拾遺愚草員外』の歌語との共有率を調べると次のようになる。

	歌数	内親王歌と同じ歌語数	歌数に対する百分率	歌語に対する百分率
俊成	747	109	14.9	2.9
定家	3828	328	8.6	1.7

この結果から、やはり年若い定家よりも俊成の影響が強いように思われる。定家と内親王の歌には、「詞句・歌趣の交流がみとめられ、内容的にも呼応するものがある」とされるが、『前小斎院百首』の内親王の、

23　忘れめや葵を草に引き結び假寝の野邊の露のあけぼの

と、『千五百番歌合』に定家が詠んだ、

葵草假寝の野邊にほととぎすあかつきかけて誰を問ふらん

に見られるように、内親王が定家に影響を及ぼしたと考えるのが妥当であるように思われる。

次に和歌の姿であるが、俊成の和歌の理念とされるものは幽玄であり、定家のそれは余情妖艶であり有心である。どちらがより内親王の和歌の世界を表現している和歌の基本であるかを考えてみたい。

有心は巧緻妖艶な体であり、内親王には定家のような殊更な妖美、虚構性は感じられない。構出性が見られるのは、俊成卿女などにおいてである。

北村恵子氏は幽玄について、「表現は『艶』であるが、主流は『あはれ』であり、それに衰退していく貴族の暗い影がさしているものが、幽玄という美であったらしい。」と述べておられる。そうであるならば、内親王の和歌に見られるほの暗さや閉鎖性は、内親王の歌風が幽玄の性質を備えていると言えるだろう。

内親王の歌語と和歌の姿には、俊成の影響が強く見受けられる。そして、内親王の歌風は俊成や西行の特色である幽玄、それも優美よりも壮美の方が量的に多いために静寂の美に近い幽玄という美的性質を有している。式子内親王の世界もまた、幽玄・静寂に依って表現されると思われる。中世という時代に、没落する貴族の一人として孤独で清浄な生活を送り、情熱を外に現わすことなく内攻させ、世の変り行く様・非力な自己の姿を「ながめ」て無常を嘆いた内親王には「あはれ」の情が感じられる。優れた詩人性を備えていた内親王は、人生の詠嘆を哀愁の美として歌いあげ、その世界は幽玄の持つ「あはれ」の美的世界を表現していると言えるだろう。

結び

以上、心情語の用い方やその姿勢から、式子内親王が「ながめの歌人」或いは「忍ぶる恋の歌人」と呼ばれる所以が明らかにされたと思う。また、内親王の歌が新古今的歌風を持ち、その世界が、俊成的幽玄の湛えているという結論を得たように思う。

内親王の代表歌と考えられるものは多いけれども、特に秀歌を選び出すとするならば、

318　玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

319　忘れてはうちなげかるる夕かなわれのみ知りて過る月日を

の二首であろうか。それぞれ『定家十体』の「有心様」「幽玄様」の例歌であり、詞書は「百首歌の中に忍戀」と「忍ぶる恋の歌人」としての内親王の面目躍如たる感がある。

だが、これらの和歌に詠まれた恋は現実のものではなかった、或いは表面には現われることはなかったと思われる。しかし、内親王の胸の中には、その恋歌に見られるような情熱が沸き上がっていたのだろう。抑えつけても溢れ出る情熱が天賦の詩才と相まって、内親王の殊玉の作品に結晶したのだと思えるのである。